

横浜とハワイ

幕末の開港以来横浜には、多くの外国人貿易商が暮らしていた。また、明治期に入って、横浜とシアトルやサンフランシスコを結ぶ太平洋航路の定期運航が始まり、横浜はその拠点となる。

横浜と移民

この間、北米・南米などへの移民が本格的に始まると、横浜はその出港地となった。一八八〇年代から一九一〇年頃までは、なかでもハワイに渡る人々が最も多かった。そのさきがけとなったのは、一八八五（明治一八）年から一〇年間続いた官約移民だった。官約移民とは、日本政府とハワイ政府が一八八六年一月に結んだ日布渡航条約に基づく契約移民のことである。なお、その後一八九八年に、ハワイはアメリカに併合されている。

ハワイに次いで多かったのはアメリカで、一九一〇年代にはハワイを抜いて最も多くなった。しかし、一九二四（大正一三）年にアメリカで排日移民法が施行されると、アメリカ・ハワイへの移民はできなくなり、南米への移民が急増する。

太平洋を渡って移民しようとする人々は、横浜で必要な手続を行い、船の出港を待った。その間滞在したのが移民宿（外航旅館）である。一九一七年にハワイに渡った芳賀武によ

れば、当時の横浜には、上州屋・熊本屋・大勢屋など二〇数館はあったという（芳賀武『蒼氓の移民宿』創英社、一九九〇年）。また移民宿は、出発前だけでなく一時帰国や引き揚げの際の拠り所ともなった。

このように横浜は、ただ単に貿易港、国際都市というだけでなく、移民たちが行き交う中心に位置していた。元々外国人貿易商などの系譜を引く人々が多く暮らし、さらに移民との関係も深い横浜において、その両者を体現する人々がいる。以前にも紹介した牧野家の人々（『市史通信』第九号、二〇一〇年一月参照）である。

牧野家のアルバムをはじめとする「牧野勲関係資料」が、当横浜市史資料室に寄贈されている。今回は、同資料の写真を紹介しながら、牧野家を通して横浜とハワイの関係を見てみたい。

牧野讓

牧野家は、イギリス人貿易商ヒギンボサムに始まる。その長男讓（じょー）がハワイに渡って成功し、三男金三郎は兄を頼ってハワイに渡り、日本語日刊新聞『布哇報知』を創刊する。讓の息子勲は、後に『布哇報知』の記者と



イギリスに渡る頃の牧野讓

なり、ハワイとのつながりを引き継ぐ。

讓の父ジョセフ・ヒギンボサムはイギリスマンチェスター出身で、幕末に來日し、横浜のフーパー兄弟商会に勤めた後、独立してオハラ・アンド・ヒギンボサム商会を設立した。足柄上郡出身の牧野キンと結婚し、一八六七年（慶応三）年に讓が生まれる。その後、映次郎・金三郎・メイと双子の兄弟に恵まれ、兄弟たちは牧野姓を名のる。

なお、ヒギンボサムとその後の牧野家については、生出恵哉「ヒギンボサム家の末裔たち」『横浜文芸懇話会報』牧野イサオ追悼集、一九八五年四月（に詳しい）。また、牧野勲の『馬頸樓雜記』（有隣堂、一九八四年）にも様々な言及があり、勲の長女薊氏の証言もある（『横浜の文化人と戦後復興』



サトウキビ農場 ナアレフ耕地と思われる

横浜市史資料室、二〇一二年所収）。以下の記述は、これらによっている。

ヒギンボサムは一八八一（明治一四）年に帰国途上、上海で亡くなる。

その翌年讓は、一五歳で父の死を報告にイギリスの実家を訪ねるが、受け入れられず、すぐにアメリカニューヨークへ渡った。大陸を横断してサンフランシスコにたどり着き、そこで職を探して駆逐艦の皿洗いに雇われたという。太平洋を航行する内、讓はホノルルで艦を離れ、ハワイ島南部カウのナアレフ耕地で商店を開いて成功する。

ナアレフ耕地

その地で讓は広島出身の浜村キク代と結婚し、一八九五年にマキ、一九〇〇年に喜一、一九〇三年に穰（しげる）



ナアレフ耕地のキャンプ



ナアレフ耕地キャンプの牧野店



日本西洋雑貨食料販売の看板を掲げた牧野店
向かって右が牧野譲



ナアレフ耕地キャンプでの牧野譲夫妻（前・後列左端）



ハワイ時代の牧野譲一家 後列右が譲 その前に妻キク代と喜一
右端がマキ 1900年頃か



帰国後の牧野譲一家 前列中央が勲 1910年頃か

譲一家の帰国

その後、譲一家は、一九〇七（明治四〇）年に日本に引き揚げる。サトウキビに病気が発生したからだという。このときキク代は身ごもっており、帰国後横浜で生まれたのが勲である。

帰国後の譲は株仲買のかたわら、ハワイからコーヒーを輸入するなど、ハワイとの関係は続いた。最も象徴的な事業は、ハワイ邦人の母国観光団招致であろう。一九一二年四月に、ハワイで初の母国観光団が計画された。ハワイの日本語新聞『日布時事』の田阪養吉が主催者となり、譲が日本での受入・案内役となったようだ。

明治・大正期のハワイ日系人の歴史を記した本（『A Pictorial History of The Japanese in Hawaii 1885-1924』

と二男一女が生まれる。
譲がハワイに渡った一八八〇年代は、日本からの本格的なハワイ移民の草創期に当たる。やがて、譲は耕地内の信

Bishop Museum Press,1985) には、四月四日付『日布時事』の母国観光団募集告知と共に、六月に広島宮島の旅館岩惣で撮影された母国観光団の写真が掲載されている。この写真のなかに、譲の姿も確認できる。告知の文章によれば、当時一時帰国した移民たちが、様々な障害によって再渡航することができず、ハワイの日系人社会が根付かないという問題が背景にあったことがわかる。組織的な母国観光団は、その対策でもあったのである。

日本各地で撮影した母国観光団の記念写真が牧野家のアルバムに数枚残されており、いずれも譲の姿を見ることがができる。譲は一九二六（大正一五）に、脳溢血で倒れて亡くなる。

譲の子どもたちはこの間、長女マキはフェリス和英女学校に留学、長男喜



牧野讓が案内した母国観光団 日光東照宮にて

一は帰国後、横浜商業高等学校から早稲田大学に進み、次男穰は『横浜毎朝新報』の記者を経て、讓の死後ハワイの金三郎の元に渡り、さらにロサンゼルスに渡った。三人の姉弟はいずれもハワイ生まれだが、ロスに渡った穰以外は米国籍を放棄したという。

従軍記者牧野勲と皇軍将兵慰問団

一方、横浜生まれで末弟の勲は、関東学院を卒業して、やがて『横浜毎朝新報』の記者となり、さらに一九三三（昭和八）年には『奉天毎日新聞』に招かれて満州に渡る。一九三六年にいったん帰国して『布哇報知』の記者となり、横浜に支局を開く。



皇軍傷病兵慰問団 鎌倉鶴岡八幡宮にて 1938年頃

翌年、日中戦争が始まると、勲は『布哇報知』の従軍記者として、毎年のように中国に渡る。開戦間もない一〇月の天津陸軍病院と、翌三八年の上海での写真が残されている。また、年はわからないが、蘇州虎丘の塔を背景に、従軍記者や従軍作家らと撮影した集合写真もある。この写真には、横浜の作家で勲の盟友でもある北林透馬も写っている（写真最後列右から二人目）。

この間、一九三八年頃に勲は、父と同じくハワイからの皇軍傷病兵慰問団を受け入れている。これは、日中戦争の開戦を受けて、母国観光団を慰問団としたものと思われる。日系人たちの日本に対する思いが伝わってくる。勲も前列右端に写る鎌倉鶴岡八幡宮の写真があり、さらに皇居や、一九三九年とされる天津の陸軍病院慰問の写真が残っている。



従軍記者・作家たち 蘇州虎丘にて 前列右端が牧野勲

前に布哇報知記者を辞め、再び奉天毎日の記者として満州に渡る。そして、戦争が終わるまで中国大陸に留まる。一方ハワイでは、二月八日の日米開戦により、翌日『布哇報知』は発行停止となる。一ヶ月後には再発行が許され、金三郎も強制収容所への収容は免れたが、横浜とハワイとのつながりはいったん断ち切られたのである。

牧野家とハワイ

戦後、勲は一年ほど中国に残って新聞の編集を中国人に指導していたという。横浜に戻ってからは、三春・ホースネックと喫茶店を開店し、これが戦後横浜の文化サロンとなっていく（前出『横浜の文化人と戦後復興』参照）。

戦後の食糧・物資不足のなか、三春やホースネックでは本格的なコーヒーを安価で出していたが、これはハワイとの縁でコーヒー豆を手に入れたからだ。一方、『布哇報知』支局の看板も再び掲げ、特置員として時折記事を送っていたようだ。

こうしてハワイとのつながりは復活したが、ハワイに残っていた金三郎が一九五三年二月一七日に亡くなり、『布哇報知』が静岡新聞の支援を受けて傘下に入ると、牧野家と『布哇報知』との縁も途切れる。『神奈川新聞』は、金三郎が亡くなった際に訃報を掲載して、ハワイにおける邦人の地位を高めるのに貢献し、「ハワイ移民の父」とも呼ばれたと紹介している（二月九日）。また、甥の勲等が二三日に追悼会を開くことも報じている。

金三郎には子どもがなく、牧野家とハワイとのつながりは、その後横浜でも忘れられていった。そもそも牧野家とハワイとの縁を結んだ讓の存在も、知る人は少ない。讓の息子勲は、戦後北林透馬と共に、横浜における文化行事・文化団体の振興に力を尽くした。その勲の業績と残した資料のおかげで、讓と金三郎の存在とハワイとのつながりを知ることができた。

また、讓と金三郎は共に、官約移民とは異なり、個人的な経緯でハワイに渡っている。このことから、移民の経緯や背景がそれぞれに多様であることにも気づかされる。こうして、牧野家の歩みを通じて、改めて横浜とハワイとの関係を再発見することができたのである。

（羽田博昭）